トラークル研究

第十一号

トラークル没後 100 年
及び
トラークル協会設立 20 周年記念特集号

2014 年 10 月

トラークル協会

〒270-0122　千葉県流山市大畔 237－3　三枝紘一方
Tel 04－7150－5782　Eメール saegusakouichi@yahoo.co.jp

目　次

1. 序言

2. 論文

1.　伊藤　卓立：トラークルの詩「途上にて」（Unterwegs）の最終行　・・・・・1
„Laß, wenn“　について　－翻訳・誤解・誤訳－

2.　三枝　紘一：トラークルの Poetik 序説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
－その稿体における語の変更から見たメチエ

3.　高橋　喜郎：トラークルの詩における silbern の用法について　・・・・・・・・45

4.　保坂　直之：連作構造から見たトラークルの『カスパー・ハウザーの歌』・・54

3. 随想

（1）　石橋　道大：「トラークルのゆかりの地を巡る旅」　・・・・・・・・・・・77
（2）　伊藤　卓立：「トラークル協会のこと」　・・・・・・・・・・・・・・・・78
（3）　植和田光晴：「今後とも心すべき問題点」　・・・・・・・・・・・・・・・79
（4）　三枝　紘一：「これからの研究の方向」　・・・・・・・・・・・・・・・・79
（5）　高橋　喜郎：「トラークルの詩に出会って」・・・・・・・・・・・・・・・80
（6）　保坂　直之：「オーストリアのトラークル」　・・・・・・・・・・・・・・82

4. 会の沿革　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83

5. 活動報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89

6. お知らせ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

7. 編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

8. 会員名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91

9. 協会会則　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92

トラークルの詩における silbern の用法について

高橋　喜郎

Ⅰ.トラークルの詩における色の用法全般について

トラークルは、ドイツ語文学において最も色を多用した詩人の一人であると言える。しかし、トラークルの色の多用は、彼の詩作の全ての時期に及ぶわけではない。トラークルの詩作は、恐らく、詩人が、ギムナジウムの生徒だった頃に始まっているであろうが、本格的に詩人を志したのは、1907 年頃からだと思われる。その根拠として、恐らく、1906 年に、詩人が、劇作家を志し、それに失敗したことが挙げられるかもしれない。つまり、トラークルが本格的に詩の創作に携わった期間は、1907 年頃から、詩人の亡くなる 1914 年 11 月までのおよそ 8 年間ということになる。

トラークルが出版を前提に書いた、1909 年の遺稿詩集を見る限り、色は、極く僅かしか用いられていない。しかし 1910 年から 1911 年にかけて、色の使用頻度は、増加している。この増加の原因として考えられるのは、当時流行していた印象主義の影響であろう。確かに、この時期のトラークルの詩は色彩豊かである。しかし、まだ、この段階では、トラークル独自の色の用法は、僅かである。それがはっきりと現れるのは、1912 年の後半からで、恐らく、1914 年の 3 月までであろう。1914 年 4 月以降、色を用いた表現は、かなり限定的になっている。

すなわち、トラークル独特の色の用法が多く出現するのは、2 年足らずの期間であり、詩人の創作期間の 4 分の 1 に満たない時期に過ぎない。しかし、その期間が、詩人の最も創造的な時期と重なるということも、忘れてはならないだろう。

色は、形容詞として、ある種の感覚や情感を担う。確かに、トラークルの詩でもその点は同じだが、彼の詩においては、同じ色を表わす言葉であっても、文脈が変われば、意味や情感も変わる。トラークルの詩において、色の意味は、かなり多義的である。その上、トラークルは、時に、色を事物の象徴として、用いることがある。ボードレールは、タロット占いを知っていた。[1] トラークルの詩を見る限り、そのエジプトの占いと関係する箇所は、見当たらない。しかし、トラークルの色の用法を読み解くには、タロットカードのシンボルを解読するような慎重さが必要である。トラークルの頭の中には、色彩の意味論的体系が半ば形成されていたであろうが、彼が作品と書簡以外、ほとんど何も残さなかったので、我々は、彼の詩を丁寧に読むことによって、その体系へ近付く他はない。

本来は、トラークルの全ての色の用法について、詳細に論じるべき所だが、紙数に制限

があるので、最も多義的に用いられている色の一つである silbern について、小論を試みたい。

II. silbern の用法について

silbern 「銀色」という言葉から、我々は何を連想するだろうか。恐らく、最初の連想は、雪原かもしれない。薄は、光の関係で金にも銀にもなる。夜空の星、銀細工、磨かれたステンレススチール、映画のスクリーンなど色々ある。では、トラークルが、silbern からまず何を連想したのだろう。

... ein Bach... silbern glänzt aus Laubgewinden.《Melancholie des Abends》 (HKA I, S. 19)
Kröten tauchen aus silbernen Wassern.《Am Moor 》(HKA I, S. 91)
silbern grüßt Weiherspiegel《Herbstseele 1》(HKA I, S. 384)

トラークルは、ハンス・リムバッハにこう語っている。「私は、20 歳になるまで、身の回りの物で、水以外、そもそも何も感じ取ったことがなかった。」[2] リムバッハのエッセイは、実証という点でかなり問題があると言われているが、この言葉は、リムバッハの創作ではないだろう。トラークルの自閉的傾向は、他の様々な証言により明らかと言える。トラークルは、8 歳の時、入水自殺を試みたとされているが、詩人は、水に強い親和性を感じていたに違いない。その入水自殺の試みは、後年、《Sebastian im Traum》の中で語られる。[3] 葉叢から覗く、銀に輝く小川、銀色の沼の水から現れるひきがえる、波立ちながら、挨拶を送る池の水面。これらが、トラークルの silbern の用法の核になっていると思われる。動く水、波立つ水、流れる水が、光を返す時の色である。

トラークルの silbern の用法が、この点に限られるなら、恐らく論及に値しないであろう。比較的に容易に了解できる用法を、いくつか挙げて見る。

Da der Knabe leise zu kühlen Wassern, silbernen Fischen hinabstieg,
《Sebastian im Traum》(HKA I, S. 88)
0, die silbernen Fische《Traum und Umnachtung》(HKA I, S. 147)
der kühle Leib im silbernen Schnee《Winternacht》(HKA I, S. 128)

魚が銀色であると断言出来るかは、問題だが、水中で身をくねらせて泳ぐ魚は、銀色の光を返す。銀色の雪というのは、かなり常套的で、ここに一度だけ用いられているが、この『冬の夜』という詩が、散文詩であることと関係があるかも知れない。トラークルは、散文詩において、当然のことながら、形式より内容に重点を置いている。そのため、詩人は、この箇所を修正せずに残したのかもしれない。

ergrünt der Bach, wo silbern wandelt sein Fuß《Traum und Umnachtung》(HKA I, S. 149)

da ich mit silbernen Fingern mich über die schweigenden Wasser bog

《Offenbarung und Untergang》(HKA I, S. 169)

川の水との接触によって、足が銀色に変わるという表現は、単に水と銀色との結びつきを暗示しているだけでなく、詩人は、水の皮膚感覚の冷たさから、共感覚として銀色を連想したのであろう。次の詩句は、黙する水の上に身を屈めている情景を描いているが、指の位置が分からない。銀色が指を修飾していることから判断すると、指は水に触れていることになる。詩人がただ感覚的に色を用いていたという見方もありうる。しかし、色を事象の象徴としても使用していたと解釈する方が、トラークルの詩の本質に近付けるような気がする。

Unter Eichen schaukeln wir auf einem silbernen Kahn.《Untergang》(HKA I, S. 116)

この場合も、silbern を入れることで、船が水に浮かんでいる感じが出ている。

《Passion》の第 1 稿・第 2 稿で、トラークルは、縦横無尽に色彩語を駆使している感があるが、第 3（決定）稿で、それらの色彩表現は、殆ど削り落とされている。詩人が、色による象徴表現に限界を感じたからかも知れない。

Oder es tönte dunkler Verzückung / Voll das Saitenspiel / Zu den kühlen Füßen der Büßerin / In der steinernen Stadt.《Passion *3. Fassung*》(HKA I, S. 125)

Nächtlich tönt der Seele einsames Saitenspiel / Dunkler Verzückung / Voll zu den silbernen Füßen der Büßerin / Im verlorenen Garten;《Passion *l. Fassung*》(HKA I, S. 394)

トラークルは、決定稿で多様な意味を持つ silbern をほぼ一義的な kühl に差し替える。多分この頃から、トラークルの色の使用は限定的になってゆく。確かに、トラークルの推敲は、多様だが、この silbern と kühl は、詩人にとってはぼ類義語であろう。もちろん、silbern の多様な意味やニュアンスの一つが kühl であるといったほうが正しいかもしれない。これと似た silbern の用例を二つだけ挙げて置く。

Auf silbernen Sohlen gleiten frühere Leben vorbei《Psalm》(HKA I, S. 56)

Mit silbernen Sohlen stieg ich die dornigen Stufen hinab

《Offenbarung und Untergang》(HKA I, S. 170)

〈Sohlen〉は、「裸足」であるから、silbern は、単に色彩だけでなく、冷たさを感じさせる。しかし、silbern が、ほぼ純粋に色彩を表わしている用例もある。

Silbern flimmern müde Lider《Die schöne Stadt》(HKA I, S. 24)

strahlend heben die silbernen Lider die Liebenden:《Abendländisches Lied》(HKA I, S. 119)

光る・輝くという動詞が、銀色を際立たせでいる。しかし、上の詩句からは、印象主義の技法に従った写実が、感じられる。それに対して、下の詩句からは、色彩による神秘化が、感じられる。似た表現であっても、文脈や成立年代が異なれば、詩人が色に込めたニュアンスは、変わると見るべきだろう。

《Kaspar Hauser Lied》(HKA I, S. 95)の最後の一行には、三通りの稿が残されている。それをまず書き出して見よう。

Also sank des Fremdlings Haupt hin.

Silbern sank des Ungeborenen Haupt hin.

Eines Ungeborenen sinkt des Fremdlings rotes Haupt hin (HKA I I, S.163)

sank

最初の詩句は、詩の末尾として順当だが、少し平凡かも知れない。最後の詩句は、類義語である Ungeborenen と Fremdlings が重複しているように感じられる。最終的に 2 行目が残ることになる。ここで興味深いのは、rot でなく silbern が採られていることである。首が落ちるということとの連想からすると、rot の方が順当な気がするが、ここで詩人はそれを選ばなかった。確かに、詩人が silbern を選択したことで、この生々しい光景は異化されるように感じられるが、それだけが目的なら、最初の詩句のように、色彩表現を省くという方法もあるはずだ。

Silbern schimmern die bösen B1umen des Bluts an jenes Schläfe,

《Traum und Umnachtung》(HKA I, S. 149)

leise rann aus silberner Wunde der Schwester das Blut

《Offenbarung und Untergang》(HKA I, S. 169)

この二つの詩句から、silbern が血と密接に結び付いた用いられ方をするのは、特例でないことが分かる。トラークルの職業は、薬剤師であったから、化学や生物学に詳しかったことは、十分考えられる。確かに、科学的に見れば、血の主成分は水である。しかし、詩人は、恐らく、そういう科学的思考からでなく、血も水も液体であるという感覚的な類似から、silbern を血と結び付けて用いたのであろう。詩人は、神聖な者の血は purpurn で修飾した。しかし、それは、野性児だったカスパル・ハウザーに当てはまらない。多分、詩人は、rot を用いても良かっただろう。しかし、それでは、常套的でもあり生々しいので、silbern を用いた。silbern は、その色の持つ超現実的な感覚によって、後に続く詩句

Ungeborenen と呼応している。

上の詩句の「血の悪の花」は、恐らく、癩病を表現しているのであろう。敬虔なキリスト教徒であったトラークルは、癩病を、血の中の悪が皮膚に顕現したものと考えていたのであろう。癩病と結びつく silbern は他にもある。

der Aussatz wuchs silbern auf seiner Stirne《Traum und Umnachtung》(HKA I, S. 49)

同じ癩と結び付く silbern でも、両者の用法は異なっている。上の詩句では、血が水のように煌めく様子を表わしているのに対し、癩が霜のように広がっていく様を描いている。silbern がネガティヴなものと結び付く例は多いが、これらの用法は、心に留めて置くべきだろう。

Aus silberner Maske der Geist des Bösen schaut;《An die Verstummten》(HKA I, S. 124)

トラークルの都市嫌いは、彼の書簡を見れば明らかだが、詩人は都市論めいたものを残さなかった。しかし、この《An die Verstummten》には、詩人の都市への憎悪が凝縮されている。通常、肯定的な意味で用いられる gold や purpurn が、負の色合いを担っている。当然のことながら、この silbern も否定的な意味を負っている。この silbern は、大都市の無機質的な冷たさを、象徴している。仮面に掛かる silbern は、この他の例でも否定的な意味を帯びている。

Trunken von dunklen Frösten silberne Larve / Über den Schlaf des Jägers geneigt,
《Nachtseele *1. Fassung*》(HKA I, S. 184)
Trunken von dunklen Giften, silberne Larve / Über schlummerunde Hirten geneigt,
《Nachtseele *2. Fassung*》(HKA I, S. 185)

生命を脅かす霜が銀色を連想させ、銀色が詩人の慣れ親しんだ毒である阿片を連想させたのであろう。《Traum und Umnachtung》には、次のような詩句が、見受けられる。〈Silbern blühte der Mohn auch,〉(HKA I, S. 150) そのことは、この詩句からもわかる。それによって、銀色の仮面は、第２稿において、更に否定的な色合いを帯びるのである。ここまで silbern の否定的な意味での用法を追ってきたが、もう１例だけ挙げる。

O der Verwesten, da sie mit silbernen Zungen die Hölle schweigen.
《Traum und Umnachtung》(HKA I, S. 150)

《Passion》の１・２稿には詩人の妹と思われる人物を修飾する silbern が幾つかあるの

で、それをまず書き出してみる。

Deine Braut, / Die silberne Rose / Schwebend über dem nächtlichen Hügel. (HKA I, S. 393)
Auf purpurner Flut / Schaukelt wachend die silberne Schläferin. (HKA I, S. 392)

deine Braut と die silberne Rose が同格で並置されているので、銀色の薔薇は、お前の花嫁の暗喩と取れる。この銀色の薔薇は、凄味を感じさせる程美しい表現である。この稿体には、die purpurne Rose (深紅の薔薇) という表現がある。こちらの方が、順当で分かりやすいが、詩人は、銀色の薔薇の方を採った。確かに、花嫁を深紅の薔薇と言い換えたのでは、常套的過ぎるかもしれない。しかし、それだけでは、根拠として、弱い気がする。詩が想像力によって書かれるとするなら、詩の解釈に伝記を持ち込むことの賛否はあるだろうが、伝記上の事実が、詩を読み解くための鍵となる場合もある。花嫁を詩人の妹グレーテと読むなら、彼女は、詩人と同様に、社会の外に置かれた者、つまり、局外者であり、トラークルの詩の中で、silbern という色は、局外者を暗示する色、もしくは、局外者と調和する色である。これは、先に論じた『カスパル・ハウザーの歌』の最後の一行からも分かる。血を表わす rot と Fremdling を詩人は集約し、その代わりに silbern を用いているからである。

下の詩句の稿体に Auf silberner Flut とあるので、silbern と purpurn を入れ替えてみても、読者は、それ程違和感を覚えないであろう。しかし、詩人は、die purpurne Schläferin という稿を残さなかった。silbern の原点は水であるから、silberne Flut という表現は、順当といえる。しかし、purpurn の原点は、神及び聖人の贖いの血の色である。もちろん、その色も両義的で、Höllenblume と結びつく場合もある。いずれにせよ、詩人の妹の言い換えである Schläferin とは、結び付かない。この《Passion》という詩を読んでいくと、詩人の頭の中にあった色彩の意味論的体系が、おぼろに見えるような気がする。

silbern の共感覚的な用法は、トラークルの詩において大変多岐に渡るが、嗅覚との結び付きを感じさせるのは、一箇所だけなので、それを書き出してみる。

Der heitere Wind spült Holdes her von wannen, / Narzissenduft, der silbern dich berührt. 《Ein Frühlingsabend》 (HKA I, S. 279)

トラークルが、水仙の香りから銀色を連想した可能性は、否定できない。しかし、近接する箇所に水を連想させる動詞 spühlen があるので、風に運ばれて来た水のように流れる水仙の香りが、肌と触れ合う感触を silbern で表わしたとも解釈できる。この詩は、1911 年 10 月頃成立したと思われるが、ここで、silbern はトラークル独自の色に特別な意味やニュアンスを持たせるような使われ方はしていない。しかし、感覚の鋭敏さという点で注目に値する詩句かも知れない。

嗅覚と結び付く silbern は、上に引用した一箇所だけだが、聴覚と結び付くものは、枚挙に暇のないと思えるほど多い。そして、音と結び付く silbern は、例えば、小川のせせらぎの音や泉の湧き出る音や波の音、滴る水の音のように、水との関連で解読出来ない点が難しい。

die Silberstimme des Windes im Hausflur.《Hohenburg》(HKA I, S. 87)

Rosige Osterglocke im Grabgewölbe der Nacht / Und die Slberstimme der Sterne,

《Sebastian im Traum》(HKA I, S. 90)

Da in Sebastians Schatten die Silberstimme des Engels erstarb.

《Sebastian im Traum》(HKA I, S. 90)

Erwacht der blühende Wind, die Silberstimme / Des Totengleichen

《Der Wanderer 1》(HKA I, S. 391)

die Silberstimme des Engels / Spielende Knaben am Hugel.《Sommer. ...》

(HKA I, S. 425)

Eine silberne Stimme 〈?〉 das Antliz barg in härenen Locken.《Sommer. ...》

(HKA I, S. 426)

これらの詩句の成立年代を調べてみると、不思議なことに、全てが 1913 年の 9 月から 10 月になっている。この時期、伝記の記載に、この〈Silberstimme〉という言葉と結び付く何らかの事実は見当たらない。しかし、この時期以降、トラークルはこの言葉を一度も使っていない。

トラークルも、他のオーストリアの中流階級の人々と同じように、フランス語を学んでいた。リルケのようにフランス語で詩を書く程ではないにしても、トラークルは、ある程度フランス語が読めたはずである。彼は、恐らく、ゲオルゲ訳だけでなく、原文でもボードレールの『悪の華』を読んでいたであろう。『悪の華』には、次のような詩句がある。

Peut-on le rappeler avec des cris plaintifs, / Et l' animer encor d' une voix argentine / L' innocent paradis plein de plaisirs furtifs?《Moesta et errabunda》[4)]

この〈une voix argentine〉は、逐語訳すれば、「銀のように響く声」となる。ゲオルゲ訳では、〈zu einer silbernen Stimme〉[5)] であり、レクラム版の対訳『悪の華』では、訳者の Fahrenbach Wachendorff は、〈mit Silberstimme〉[6)] と訳している。トラークルがゲオルゲ訳まで読んでいたとすると、この言葉に影響を受けなかったとは考えにくい。トラークルがこの表現を一時的にしか用いなかったのも、他の詩人の言葉の受け売りだったからとも取れる。

この言葉は、ボードレールの原詩に即して考えても、この世の存在でない者の声というニュアンスがある。〈die Silberstimme des Windes〉は、《Hohenburg》の全体の文脈から考

えると、霊の世界から吹いて来る風の音のような気がする。この詩の稿体には、それを裏付ける〈die tote Stimme〉という詩句がある。つまり、ここで、Silber は、死者を暗示していると取れる。《Der Wanderer *l. Fassung*》の〈die Silberstimme des Totengleichen〉は、決定稿で、〈die Vogelstimme des Totengleichen〉に書き替えられる。恐らく、詩人は、初稿で用いた Silber と Toten に意味の重複を感じたため、改変したと思われる。

ボードレールは、〈une voix argentine〉という言葉を用いた時、恐らく、天使の声を思い描いていたであろうから、〈die Silberstimme des Engels〉という詩句は、原詩に即した順当な用法と言えるかも知れない。多分、「天使の銀の声」とは、銀の鈴の響きに似た声であろう。〈die Silberstimme der Sterne〉は、他の4例と異なり、それほど難解とは感じられない。夜空に、数多の星が瞬いているのを見れば、星達が囁き合っているように感じる人は多いであろう。恐らく、詩人は、その感覚を〈die Silberstimme〉と表現したのであろう。

他の用例をいくつか、成立年代順に並べ、見ていこう。

Der Wind läuft silbern durch die Erlen hin.《Heiterer Frühling 1》(HKA I, S. 363)
Des Weidenwäldchen silbernes Gelüster;《An Angela》(HKA I, S. 287)
silbern tönt die Leier / Des Orpheus fort im dunklen Weiher
《Die drei Teiche in Hellbrun》(HKA I, S. 178)
Silbern zerschellt an kahler Mauer ein kindlich Gerippe.《Föhn》(HKA I, S. 121)
Immer lehnt am Hügel die weiße Nacht, / Wo in Silbertönen die Pappel ragt,
《Der Wanderer》(HKA I, S. 122)
Wenn Orpheus silbern die Laute rührt, / Beklagend ein Totes im Abendgarten,
《Passion *3. Fassung*》(HKA I, S. 125)
Silbern weinet ein Krankes, / Aussätziges am Weiher,《Abendland *2.Fassung*》(HKA I, S. 404)

最初の詩句では、春風の水のような爽やかな感触とハンの木の葉の触れ合う音とその木の葉の日の光を返す様を silbern で表現しているように思える。次の詩句では、柳の葉の擦れる音を、暗喩を用い、「銀色の囁き」と表わしている。この二つの比較的早い時期に成立した作品から推測すると、詩人が、silbern を音の比喩として使う用法の基本は、葉の触れ合う時のかさかさとした音にあったのではないだろうか。オルフェウスの竪琴の響きを、silbern で修飾するのは、純粋に詩人の感覚だけの問題かも知れない。しかし、トラークルは、オルフェウスが妻のエウリュディケーを連れ戻すために冥界へ下った説話を知っていたであろう。この詩は、遅くとも 1912 年 12 月に成立した作品だが、もしかして、詩人は、オルフェウスの竪琴の音が、冥界から響いてくると感じ、silbern を用いたのかも知れない。《Passion》は、1914 年の作品なので、silbern は、冥界ないし霊界を暗示している。オルフェウスの竪琴は、かすかな、かわいた軽やかな響きを奏でる。そして、それは、冥界の響きでもある。《Föhn》の詩句は、もし schellen なら鈴の鳴る音なので、最初に置かれた silbern

と良く合うが、〈zerschellt〉を修飾しているので、骸骨が粉々に砕ける視覚上のイメージときゃしゃきゃしゃいう音との両者を silbern で暗示しているように感じられる。
《Abendland *2.Fassung*》の silbern は〈weinet〉を修飾しているので、病む者の啜り泣きを連想させるが、〈Aussätziges〉との関連で用いられた可能性も排除出来ない。最後になったが、《Der Wanderer》の〈Silbertönen〉には、ポプラの葉が擦れ合うかさかさとした音だけでなく、天に向かって聳えるポプラの木の葉の、ちらちらと輝いている様子が目に浮かぶようである。

silbern についてこれで語り尽くされたわけではない。ただ、幾つか特徴的な点を拾って見ただけである。しかし、この一語を取っても、トラークルの言葉の用法の多義性は、明らかである。このことは、色彩表現に限らない。読者は、その多義性に注意しながら、トラークルの詩を慎重に読んでゆくべきだろう。

注

引用した詩句は全て、ザルツブルク版歴史批判全集による。

Georg Trakl: Dichtungen und Briefe. Historisch-Kritische Ausgabe in 2 Bänden. Herausgegeben von Walther Killy und Hans Szklenar. Salzburg (Otto Müller) 1969.

注 1. Baudelaire の《Chant d' automne I》には次のような詩句がある。

〈Mon esprit est pareil à la tour qui succombe / Sous les coups du bélier infatigable et lourd.〉逐語訳すると「私の精神は、重く弛まない破城槌の打撃よって、崩されてゆく塔に似ている。」となる。タロットカードの 16 番は、塔の破壊で、最も不吉なカードとされている。ボードレールは、そのカードを意識して、この詩句を書いたに違いない。

注 2. Erinnerung an Georg Trakl. Gesamtherstellung von Wels Welsermühl. Salzburg (0tto Müller) 1966. S. 122.

注 3.《Sebastian im Traum》は、自伝的要素の色濃く反映された作品で、トラークルの幼時の思い出が作品の核を担っている。入水自殺を試みたことに関する記述は、重複を厭わずに引用する。〈Da der Knabe zu kühlen Wassern, silbernen Fischen hinabstieg,〉このことに関する証言は、次の箇所にある。Christa Saas: Georg Trakl. Sammlung Metzler Band 124. Stuttgart 1974. S. 28.

注 4. この『哀しみ、さ迷える女』のこの箇所を逐語訳する。「秘められた愉悦に満ちた無垢の楽園を、嘆きの叫び声によって呼び戻すことができるだろうか。それを、銀のように響く声で再び蘇らせることができるだろうか。」

注 5. Baudelaire: Die Blumen des Bösen. In: Stefan George : Sammlung. Band 13/14. Stuttgrart (Klett-Cotta) 1983. S. 75.

注 6. Charles Baudelaire: Les Feurs du mal / Die Blumen des Bösen. Deutsche Übersetzung von Monika Fahrenbach-Wachendorff. Stuttgart (Phillipp Reclam Jun.) 1988. S. 131.